



ウィルスとの闘いの年

上岡 章男 株式会社ウエテック研究所 代表取締役

喫緊の世界的課題は、やはり新型コロナウイルスとの闘いである。昨年に始まった Covid-19 のパンデミックは、2020 東京オリンピックを延期させ、世界中に多くの犠牲者を出し、米国の大統領選にも影響を与え、未だ衰えることなく、益々拡大している。一方、各方面で急遽ワクチンが開発され、完成されつつある。今年はウィルスに対し人類が反撃を開始する年といえる。

人類の歴史に残る感染症との闘いは、人口が密集した農業共同体が形成された古代から始まって現代にまで延々と続いている。その中でも最古で且つ最大のものは、「天然痘」ウィルスである。紀元前 1350 年代エジプトに始まり、日本には、シルクロードを通して、新羅経由で仏教の伝来とともに伝わってきた。奈良時代には全盛を誇っていた藤原氏の四兄弟が次々と犠牲になり、長屋王の祟りだとして恐れられた。聖武天皇は短い期間に遷都を繰り返し、東大寺の大仏や国分寺を建立し、仏に救いを求め、皇后の光明子は悲田院や施薬院を設け、貧しい人々や病に苦しむ人々に善行を施した。この頃の日本の人口の 3 割の 150 万人が天然痘で亡くなったといわれている。平安時代にも、藤原氏による摂関政治の隆盛期に天然痘の流行があり、摂関政治の終焉を迎えた。

コロンブスのアメリカ大陸の発見の後、15 世紀の大航海時代になって、天然痘が新大陸に持ち込まれ、抵抗力のまったくない先住民族の間で感染被害が拡大し、スペインによるアステカ帝国の征服、インカ帝国の征服の後、両文明を滅亡に追い込んだ。

18 世紀の終わり（1796 年）ジェンナーによってワクチン（種痘）が完成し、それから約 1 世紀後の 1909 年に日本では「種痘法」が制定され、国民に種痘が定着した。そしてジェンナーの種痘完成から 2 世紀近く経った 1980 年 WHO が「天然痘根絶宣言」を承認した。なお、1976 年を境に日本では種痘を行っていない。天然痘は、長い歴史の中で、唯一人類がウィルスに打ち勝った記録であり、まだまだその他の多くの感染症が存在し、現在も人類はそれらと闘いながら共存している。

世界中の経済および交通が非常に発達した現代では、今回の新型コロナウイルスの感染拡大は、今までにないスピードで、その経済界・交通業界に大打撃を与えている。一方でワクチンの開発も今までにないスピードでなされていることも確かであり、その普及もスピードアップされることを期待する。重要なのはできるだけ早く、現在存在している他の感染症と同程度の「共存状態」いわゆる「with コロナ状態」にすることと思われる。

この期を境にして、好むと好まざるにかかわらず、人と人との集中や接触を極端に避けるために、すべての業界で、人の分散化と情報のデジタル化、リモートワーク化、キャッシュレス化、自動化などが一気に進まざるを得ない。技術的にも、まさにそのようなタイミングに来ていると思われる。人が集まるところで、人々を支えていた外食産業も厨房業界も例外ではなく、クックチル、IoT プラットフォームの開発、ロボット化など非常にタイムリーである。しかし、必然的に今までにない新しい業態が生まれる可能性を秘めており、そのための機器開発が求められるので、注意しなければならない。

忘れてはならないのは、その間も地球の温暖化は、確実に進んでいることである。日本エレクトロヒートセンターは、「電気加熱」の観点から CO₂ の排出削減に増々一役も二役も買っていただきたいと願う次第である。

（うえおか あきお）一般社団法人日本エレクトロヒートセンター 特別会員